
<書 評>

H.O. Kendall, F.P. Kendall & G.E. Wadsworth:
Muscles—Testing and Function, 2nd Edition

寺沢幸一・明石謙共訳：

筋力テスト—筋の機能と検査

荻 島 秀 男

本書の第1版は1961年に出版され、第2版は1971年に全く新しい感覚でかなりの部分が追加・改訂され出版されたものである。

第2版の特長は著者に Gladys E. Wadsworth 博士が加わったことである。彼女は理学療法士としてスタートした方であるが、解剖に興味を持ち、解剖学教室に入局、その後 Long のもとで微小ワイヤー電極を使用した筋電による筋の機能分析に従事し、その後再度解剖学の教室に戻り、現在はメリーランド大学医学部の解剖学助教授として医学生のみならず、理学療法・作業療法における解剖学を教えておられる。彼女の講義は、その経歴に基づき実に興味深いものであり、その中で使われる色々な説明やイラストが今回の第2版に加えられた主な部分となっているようである。評者も10数年前、彼女と2年間共に勉強したことがあるが、解剖学者としての彼女の知識欲、バイタリティーには全く頭がさがった想い出が強い。

正確に行われる徒手筋力テストは診断の基本になるし、患者の経過観察、評価にも大きな武器であることは間違いない。従来使用されてきた Daniel の徒手筋力テストのみでは

説明が不十分な点もあり、今回出版された Kendall 第2版はその点を充分意識して書かれたものである。従って、Daniel のものと Kendall の第2版とを併用すればかなり徒手筋力テストの概要がのみこみやすくなる。

第1章の徒手筋力テストにおける基本原則では、あまり患者を動かさないで手順よくテストを行う順序が学生には役にたつであろう。右利きと左利きの特徴が表示されているのもおもしろい。

第2章の関節の動きと位置では姿勢、O脚、X脚についての考え方、特有の検査カードが含まれており、臨床面で活用出来る。

第3章の神経と筋のチャートは従来の色々な解剖書に表わされているものと大差はないが、同一の本に含まれている点で実習などでは便利である。

第4章上肢および肩甲筋と第5章の下肢筋、それに第6章の体幹筋の3章で Dr. Wadsworth の加筆の効果がはっきり出ている。筋に拘縮が起こった際には何に注意するか、短縮が起こっている際のテスト肢位、テスト、その意義などが含まれ、特に固定肢位については各々くわしい説明

が行われているので、テスト法を勉強中の方に、又我々の復習にも大変参考となる面が大きい。関節運動と各々の運動に関与する筋が表示されている点でも使いやすい本である。

体幹筋でも、項目として体幹挙上中の脊椎と股関節の運動や腰椎過伸展位で行う体幹挙上など、実際臨床に従事している方々が現場で活用出来るものが多い。

第7章の顔面、眼、咽喉、頤、呼吸筋に関しては第1版と大差がない。

全体的にいえることは、徒手筋力テストの基本を勉強する上で Daniel の教本と併用して使えば最も効果的な教本であり、筋のイラストが色づけであったりエッチング的なイラストになっているので理解を容易ならしめている。また固定の肢位を強調している中でトリックモーションのとらえ方が述べられている。

寺沢先生はリハビリテーション界の先輩であり、明石先生はまだ日本に2つしかないリハビリテーション科講座担当の教授である。徒手筋力テストの重要性を充分認識しておられる両先生の御翻訳だけに、内容は平易な日本語で統一され、Kendall の第2版が生きた書になっている。Daniel の徒手筋力検査法とは是非併用して活用して頂きたい本で、特に理学療法、作業療法、整形外科、リハビリテーション医学の道を歩まれる方々には必携の書である。

(東京都養育院付属病院リハビリテーション部長)

(288ページ、6,000円、日本肢体不自由児協会刊)